

# 長岡市和島地域下富岡地区防災ドラマシナリオ

## 「避難どきと避難ルート」

地区：新潟県長岡市和島地域 下富岡地区

災害：豪雨

登場人物

- ・大野 班長
- ・大野の奥さん
- ・桜井 区長
- ・二宮 近所の班長（農家）
- ・相場 地区の役員
- ・松本さん（奥さん）
- ・松本のおじいさん

昨日からの雨は、日曜の朝になっても止まないで降り続いていた。

7月は夜明けが早くどこの家も起きてくるのが早い。大野も朝の5時に起き、窓を見て止まない雨を知りうんざりした気持ちになった。

その直後、朝の5時過ぎに避難準備情報が発令されたが、この「避難準備情報」はこの長岡市も発祥のもとになった地のひとつになっている。

10年前の福島新潟豪雨で逃げ遅れたご老人が多数なくなっており、少しでも早く避難できるようにと制定されたのが避難準備情報である。

まだ避難勧告を出すには早い段階で、準備と早めの避難ができるように「情報」として住民に伝えてくれるのだ。

これにはもう一つ特徴があり、避難勧告の決断がしにくい傾向がある行政組織に防災に関する動きを始めるきっかけにもなるように設計されている。

国の方針で最近では早い段階で避難準備情報や避難勧告が出され、行政職員はその度に避難所を開設するなど、緊急時の体制を整えている。これは、大きな被害を防ぐために空振りを恐れず、早めの避難行動に結びつけるためである。

ただ、水害の場合には自宅2階への避難も避難先として推奨されており、豪雨水害などの避難準備情報の場合、実際に避難してくる人は少ないのが実際である。

大野の家は、長岡市の北西部和島地域の下富岡という地区にある。

下富岡地区の最寄りの避難所は長岡市役所和島支所であるが、そこに行くまでに問題がある。それが、この物語のテーマの一つである。

ここまでの状況を整理してみる。災害時は自分たちが置かれている状況を冷静に俯瞰することが防災の一つである。

- 1、7月の日曜の朝である。日の出は早く明るい。
- 2、昨日からの雨(梅雨前線)で、5時15分に避難準備情報が発令されたばかりである。

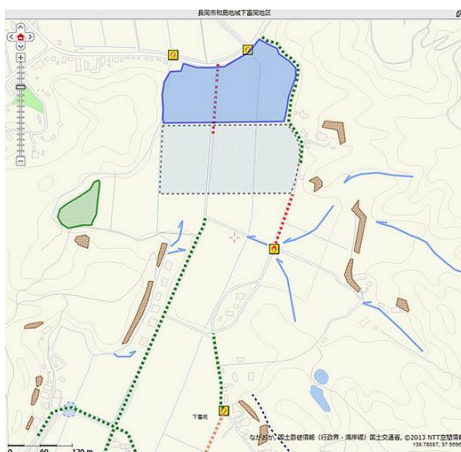
また、この地区の特徴は以下のとおりである。

- 1、中央を幅4mくらいの川が流れ、その両側に細長い平地があり水田となっている、開口部の北部を除いて三方を低い丘陵に囲まれた南北に細長い地形である。
- 2、豪雪で知られる新潟県の中越地域であるが、海に近く雪は雪害になるほどは降らない。
- 3、一番大きく揺れた中越沖地震でも半壊が4軒程度、大きな河川も無く、高い山やがけも無く地すべりや大きな土砂崩れなども無い比較的災害の少ない地区である。

しかし、豪雨には頻繁に悩まされている。

- 1、低い丘陵状の山なので大きな崩れはないが、小規模な土砂崩れが頻繁にあり道路をふさぐこともある。
- 2、北部の地区の出口は水はけが悪く、ここも頻繁に冠水して通行ができなくなる。

以上、整理終わり



大きな災害はないが、小規模な災害で常に不便と隣り合わせ、それが下富岡地区なのである。

その為、地区では近年独自に災害防災マップを作って大雨の時に地区がどのようなようになるのかを初めて地図上に表わしてみた。

地図に今までの災害の様子を表すことで様々な気付きがあり、大野もそのワークショップに参加して良かったと思っている一人だ。

朝ご飯を食べ終わったころ、地区の連絡網で役員・班長の招集がかかった。

地区内で災害による支障が出てきたようなときに招集がかかる。

大野「おい、かあちゃん、ちょっくら集落センターまで行ってくるわ」

大野の奥さん「何があったんだろうね」

大野「いやあまた、あつらこて、出口で排水が間に合わんで水が上がったんだと思うれ。」

そういうと大野は家を出た。

大野の奥さん「きいつけての」

奥さんは豪雨の中でてゆく旦那に声をかけた。

雨の音入る

車の音入る

センターには既に何人かの役員が集まっていた。

全部で 20 人いるが不在の人を除いた 14 人が集まった。

広い畳の部屋

ホワイトボードに昨年作った地図が貼ってある。

区長の桜井が話し始めた

「皆さん、雨の中ご苦労様です。

避難準備情報がでていますが、地区では各自の判断で避難していただくことになっています。

ですが、知っている人もいると思いますが、地区からの出口の道路が冠水してしまうと避難がしづらいこととなります。今回また、出口の水はけが悪くなっていますんだが、そうですね、二宮のとうちゃん。」

区長は地図のその部分を指さしながら声をかけた。

二宮「そーらんだて、うちの田んぼ見に行ったら、水かぶっていて、道路もあと少しで水があがりそうでしたて。」

相葉「そら、いつごろだね」

二宮「ここに来る時も見に行ってみたから 10 分くらい前だかの」

区長の桜井「みなさん、そういうことなんで、水があがって車で避難所に行けなくなる前に高齢者・病人・けが人は市の避難所の方に行ってもらった方が何かと安心ですんで、そのようにそれぞれの地区の人に伝えてください。

ほかに通れる道もありますが、万が一の土砂崩れなど考えると真ん中の道が一番安全ですので今のうちです。」

災害時には集落センターが避難所兼災対本部として使用されることになっており、区長はじめ自主防災会の役員が詰めることになっている。

安全になるまで区長と役員はここで判断をし、避難に来る人が居れば対応する。

出口が冠水した場合、唯一の地区自主避難所なのである。

大野はセンターを出て自分の班の地域に行こうと中央の道路に出る前に一時停止をして左右を見た。

すると今話したばかりの地区の出口付近で軽自動車が止まっていた。

「水があがったかな」

大野は自分のゆく道とは反対の方向に向かった。

軽自動車の前まで来て道を見るとだいぶ冠水が始まっていた。

思ったよりずっと早い今までにない水の出方だ。

まだ普通車の 4WD なら問題なさそうだが軽自動車だとちょっと危険かもというところまできている。

傘をさして軽自動車の運転席の脇に行った。

車の窓が開いた。地区の人は全員知っている。

大野「松本さんだねか、この車じゃここ通るのがおっかねの」

松本「私おっかなくて行かれないて」

大野「そうらの、万が一車が動かなくなったらたいへんだしの。ところで、どこ行くんだね。」

松本「いやね、通れるうちにじいちゃんを避難所に連れて行こうと思ってさ」

大野「じさどうしたね。」

大野は助手席に声をかけた。

松本のおじいさん「いや、おれは大丈夫ら言うてんだろも、かあちゃんがどうしても行こういうんでの乗せてもろうたて」

松本「この前も発作が出て救急車に来てもろうたんで、やっぱり避難所に行ってもらえば安心だしの。早目に行かねえと、ここが通れなくなるかと来てみたけど、もう通れないの」

大野「いやあ、そういう事情だったかの」

松本「大野さん、息子がここ通れん時はあっちの山際の道が通れるかもしれないって言うていたけど、どうらろ」

大野「このくらいだったら、向こうの道はまだ通れるて。あっち廻ってみれて。山際なんで土砂崩れには気を付けての」

松本「ありがとの。ゆるゆると走らせて行くて」

大野「よう知ってたの息子さん」

松本「何言ってるんだて、おめさん達が去年配った地図見ながら言うてたんだて。」

大野「そらったんだ、そら嬉しいの、さあ、向こうが通れるうちに早行げて、すぐ俺も様子見に行くっけ」

松本さんは、道を引き返し山側の道へと向かった。

大野は車に戻り区長に電話をかけた。

大野「区長、今回は水の出が早くて、もう水が道路にあがって、軽だと通れんかもらて」

桜井区長「そら早い、そろそろ通行止めにしなればならんの。支所に聞いてみるわ」

区長は長岡市役所和島支所に電話を入れてくれる。

警察や消防の了解もとってじきに通行止めにしてくれるだろう。

大野はさらに自宅に電話をかけた。

妻が出た。

大野「中央の道が軽では通れなくなった。じきに普通車もだめらわ。山沿いの道はまだ通れる。避難しなくちゃならん人は早めに避難所に行くようにして、山沿いの道から行くように、班の人達に言うて廻ってくれっかの」

大野の奥さん「はいよ、で、あんたどうすんの」

大野「おれは山沿いの道の確認に行くわ、無いと思うけど場合によっては土砂崩れもあるし、道も狭いっけ、雨だし、見ていないとあぶねえすけ」

大野の奥さん「あんたがやらなくてもいいんじゃないの」

大野「いや、こういうのは気が付いた人がやらなくちゃ間に合わんで、俺が少し見ているて。」

大野の奥さん「じゃあ気をつけての、代わりの人が居たら帰って来ての」

大野「あいよ、わかったて」

大野はさういうと、松本さんの後を追って山沿いの道の方へと向かった。

おわり